ダンジョンに最強の先輩がいるのは間違っているだろうか『リメイク』

厨二病なりかけ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはダンジョンに最強の先輩がいるのは間違っているだろうかのリメイクです。

それと、この作品で登場するキャラクターは、リメイクする前と少し違います。

設定もまあまあ変えました。

目次

プロローグ ―― 1
第一話 ―― 5
第二話 ―― 13
第三話 ―― 24
第四話 ―― 40

プロローグ

ある名家に一人の男が生まれた。
彼の名前は天神　九鬼斗。
今も生きる、九鬼斗の祖父である、天神　竜馬は嘗てオラリオ二大ファミリアと言われていたゼウスファミリアの幹部を務めていたほどの実力者であった。
彼のレベルは5。一級冒険者であった彼はレベル5の中では最上位のポテンシャルを有しており、彼は一度推定レベル7の、階層主を単独で倒したという伝説を生み出した。彼は驚異的な剣技を持ち、今尚オラリオの神達は、世界一の剣士と聞かれれば天神　竜馬と答えるだろう。それほどまでに彼の剣技は研ぎ澄まされていた。
他の武技にも、達人級の技術を有しており、武神の技術すら上回っている等と噂される程だった。
しかし、そんな彼にも寿命というのがあり、前線からその身を去った。
オラリオからも去り、その後とあるヒューマンの女性と恋に落ち、子を持った。
そして彼は、子孫に彼が持つ全ての武技を教えて、躾けた。
そんな子孫は全てを受け継ぐことはできずとも、確かに高レベルの実力を有した。
竜馬以外は神の恩恵すら受けていないが、竜馬が見る限り、レベル2の中位程度の冒険者ならギリギリ倒せる程度と考えていた。
実質、竜馬が推定レベル7のモンスターとのポテンシャルの差を埋めたのは彼の戦闘技術にあった。そんな戦闘技術を全てとは言わずとも、断片程度は受け継いでいる彼らは強いと言えるだろう。
そして、竜馬もすっかり、おじさんみたいな格好になった頃にある男が生まれた。
自分の初めての孫にあたる子を彼は愛でた。次々と他の孫も生まれて行ったが、竜馬の中では一番可愛いと思っているのは、最初の孫である九鬼斗であった。

九鬼斗がきちんと言語を話すようになった頃、九鬼斗は竜馬を驚かす驚異的な才能を発揮することとなる。
「ねえ、竜馬お祖父ちゃん。いつもお父さんや、おじさん達に教えてるのって何なの？」
「ん、ああこれは武技といって、自分の身を守ったり、大切な人を守るのに必要になる力の一つだ」
「へ～、それって今の僕にもできるかな～？」
「はははは、そうだなもう少し大きくなって、体が強くなったら教えてやる」
「むぅ～いいもんね！勝手にそのぶぎ？っていうのも習得してやるもんね！」
「はは、まあ精々頑張って、挑戦してみるといい」
そういって九鬼斗はまず武技を習得するには、自分に何が必要かを考えた。
祖父は言った。体が強くなればいいと。つまり、強い体を持っていないと習得できないのだろう。ならば、体を鍛えよう。
九鬼斗はいつも興味本位で、祖父が父達に武技を教えている部屋を覗いていて、準備運動みたいな形で、体を腕と足で支え、腕を曲げて自分の体重を腕にかけ、又腕を伸ばしてという動作を繰り返していた、腕立て伏せというのを筆頭に色々な準備運動を九鬼斗は見ていた。そして、それら全てを再現し、やった結果それぞれの特訓には、己の筋肉に負担をかけ、その筋肉を強くしているのだという結論に至った。それからというもの、毎朝早くに起き、父達が朝早く行っているジョギングに参加したり、その後は時間さえあれば父達の準備運動みたいなのを徹底的にバランス良くこなしたりした。雨の日も、風の日も、雪の日も、そのようなことを習慣的に行っていった九鬼斗は７歳の頃に、子供にしては凄まじく強い体を手にいれた。
その体の強さを手にいれた九鬼斗は正式に、祖父である竜馬に稽古をつけてもらうためお願いした。それを竜馬は
「覚悟はあるのか？辛い稽古だぞ。本来ならばもう少し後に行うものだ。泣き言を吐くようなら直ぐにやめさせるが、それでもいいなら稽

古をつけてやる」
九鬼斗の答えは勿論肯定だった。
それから九鬼斗はかなりきつい稽古を受けた。泣き言をいいそうにもなった。何度も吐瀉物を吐いた。辛すぎてやめようとも思った。しかし、かれは止めなかった。
そんな稽古の中、竜馬は九鬼斗の驚異的な才能に驚いていた。一度見せた技は二度と通じず、その技を直ぐに再現することも可能であり、まるで乾いたスポンジに水を与えるような感覚であった。竜馬はそんな彼をみて、とある決心をした。
稽古を受けてから五年経った頃、九鬼斗は父や、叔父の誰よりも強くなっていた。同年代の子とは比べ物にならず、九鬼斗は五年の間に祖父が持っている武技のほぼ全てを受け継いでいた。更に九鬼斗は祖父よりも高い技術を有しているものもあった。投擲術、徒手空拳、双剣術、槍術、弓術、といった技術は祖父よりも技術の面では上回っていた。勿論徒手空拳で戦えば祖父は勝つが、それは神の恩恵を受けているからだ。九鬼斗は祖父の技術を習得すると、自分なりに改造して、自分自身に一番合う型にはめたりした。実質、九鬼斗はもはやレベル３の中位の冒険者程度ならば肩を並べられる程強くなっていた。その内、竜馬は、彼が持つ奥義すらも九鬼斗に伝授させた。そうして九鬼斗は祖父にも勝る戦闘技術を有した。
それから九鬼斗は、極東に住んでいたため、そこに住んでいる武神の元にまで行き、稽古をつけてもらうようになった。別に祖父に教わる必要が無いと思った訳ではない。ただ、他の面からも自分の実力を見たいと感じたからであった。それからというもの、１２歳になり、更に自分の中にある能力を昇華させていた彼は僅か半年程で五人の武神が有する武技を全て習得した。武神タケミカヅチの眷属である子に対しても、傷一つなく、５対１の形式の模擬戦にも勝ってしまった。
そんな彼は一際浮いた存在となった。神の恩恵を受けていない身で、神の恩恵をうけている子に勝つという異常さに周りは恐怖を抱いた。もはや彼に勝てる者は、彼の祖父である竜馬以外にいなくなって

しまった。九鬼斗は同年代の子からは陰湿ないじめを受け、実の親からも白い目を向けられるようになった。そんな彼は当初ひどく心に傷を負って、精神が乱れた時もあったが、精神統一の技も習得し、彼は武技以外にも色々なことに手を出すようになった。盗術、勉学に励み、得た演算能力、美形である自分の容姿を更に引き立たせるためのカリスマ性を手に入れたり、今までも良く出来ていた人の技術の再現の能力を見ただけで模倣し、その技術を自分なりに完成させたりした。魔法についても勉強し、自ら全属性の魔法を使えるように魔法を作ろうとしたこともある。そんな彼を見た祖父は、九鬼斗にあることを告げた。

「九鬼斗、お前は儂や、武の神である者たちの戦闘技術も手に入れた、頭も良く、戦闘意欲もある。そんなお前じゃが、ここは生きにくいじゃろ」

「・・・・」

「愛孫であるお前を手放したくはなかったが・・オラリオへ行け。九鬼斗よ。そこにはお前が待ち望んでいる環境がある。その技術を、人を守るために使え、好きなやつも作れ、お前が最強の冒険者となり、神からも認められるようになり、恋人ができたりしたら又戻ってこい。儂はお前のことを心の底から愛している」

「ありがとうおじいちゃん。分かった。僕は成るよ最強に。そして、僕が持っている全ての能力を持って、大事な人達を守るんだ！」

　そうして九鬼斗は家を出た。オラリオに、そしてダンジョンに素敵な出会いを求めて。

第一話

「はあ～」

彼は極東から迷宮都市オラリオへ行くため、馬車を取った。祖父から多少お金を貰い、馬車に引いてもらっていたのだが、その道中、盗賊に襲われた。

「何で、家を出て、最初に戦うのが盗賊なんだか・・」

「はあ～、とっとと倒して進むか」

「すいません」と馬車を引く人に一言声をかけ、

「あれ倒してもいいですか？」

「は？何言っている？お前あの名家のボンボンだろ？たんまりとお金を持っているはずだからな～。悪いが、少しの間、人質になっていてもらうぜ。あと、盗賊を倒そうとは思わないことだな。あれでも神の恩恵をうけている連中だぜ。大人しく捕まりな」と言い、手を伸ばした。

その瞬間、手を伸ばした男は地面に叩きつけられ、意識を奪われた。

その様子を見ていた盗賊達は、その一連の動きを見切ることができておらず、少し、恐怖を抱いた。果たして同じ芸当が僕にはできるか、と。

それでも依頼を受けた以上、人質にするのは決定事項だった。だから、恐怖心は未だ抱きつつ、盗賊の頭である男は命令を出した。

「かかれー！」

そうして、総勢１５人程の盗賊達が一斉に九鬼斗に襲いかかった。

その動きを見て、九鬼斗はため息をついた。

「はぁ、まあこんな程度か」

そう呟いたあと、直ぐに意識を敵に向け、祖父に教わった徒手空拳の技を繰り出す。確か、ムエタイといった名前だったか・・。

（蹴らない方の軸足を足の裏の母子球で支えて、カカトを相手に見せるイメージでムチのように足をしなやかにして、肩の力を抜いて蹴る！）

九鬼斗が放った蹴りは頭の横顔をしっかりと捉え、１０ｍ程吹き飛

ばした。
　他の者達にはもれなく飛び膝蹴りや、拳を振った等して、全員倒した。
「まあ、こんなもんか」
　まだぎりぎり意識が残っていた盗賊の一人は「化け物が・・」という言葉を残し、意識を失った。
「化け物か・・・俺はただ、おじいちゃんに追いつくために頑張っただけなのにな」
　そして全員を倒し終わったあと、九鬼斗は馬車に再び乗り、今度は自ら馬を使い、走らせた。その後の道中もモンスターに襲われたり等はあったが、極東を出てから二週間後、無事迷宮都市オラリオへとたどり着いた。
「さて、それじゃあまずはおじいちゃんに言われた通り、ギルドに向かうか」

――ギルド

「はぁ～、ギルドの受付って以外と疲れるのね」
　そう言葉を零したのは新しくギルド職員となったハーフエルフであるエイナという美女であった。端から見ても、整った顔立ちをしており、出ているところは出ており、どちらかというとスレンダーな体型をしていた。
(周りの男冒険者から変な視線で見られている気がするわね。まあ、これも仕方がないことだよね)
　そんなエイナの元にある美少年が現れた。年齢は１２～１４といったところか。黒髪に、極東にある服を着ており、恐らく、極東出身の者だろう。
「え～と、ここには何をしに？」
「あっ、冒険者の登録をしに来ました」
(またか。かっこいい冒険者に憧れて、自分も冒険者になろうっている典型的な子かな)
「はい、ではこの紙の必要記入欄を埋めてください」

そうして九鬼斗は記入欄を埋め始める。
名前：天神　九鬼斗
年齢：13
性別：男
出身：極東
所属ファミリア：無所属
レベル：空白

九鬼斗は記入を終えると紙をエイナに渡した。
「ええ～と、何々・・（名前は天神　九鬼斗くん、年齢は13、出身はやっぱり極東、まだファミリアには所属していないのか～）はい、拝見させていただきました。ではどのファミリアに入りたいと思っていますか？」
（あ、それについては考えていなかったな。おじいちゃんがいたゼウスファミリアっていうところでもいいけど、まあ、おじいちゃんの孫だからって優遇されるのも嫌だし、適当に探索系ファミリアを見繕ってもらうか）
「では探索系ファミリアの情報が書かれた資料とかをもらえますか？」
「う～ん、そんな簡単に資料って渡せないんだよねー。ごめんね。でも今大きな探索系ファミリアって言ったらゼウスファミリアとヘラファミリアでしょ。それと今勢いがあって準トップファミリアといえばフレイヤファミリアとロキファミリアっていうところかな。それと最初にいった三つのファミリアはおすすめしないわ。ゼウスファミリアとヘラファミリアは入団試験も物凄く厳しいって聞いたし、フレイヤファミリアの場合は、主神様自体が気に入った子しか入れないって有名だから、大きなファミリアで入れるとしたらロキファミリアかな。ロキ様は美形の子が好きだって聞くし、九鬼斗くんにもチャンスはあると思うよ。じゃあ、ロキファミリアの場所だけ教えておくね」
と言って、地図をくれた。

「もしも入れなかったら又おいで、他のファミリアを探してあげるから」
「何から何までありがとうございます」
「いえいえ、サポーターですので」
そう会話だけして、九鬼斗は地図を頼りに、ロキファミリアの本拠地がある所まで向かった。

――ロキファミリア

「う～ん、暇や～～！アイズたんも最近冷たいし、リヴェリアママもアイズの面倒で忙しいし、誰も構ってくれへん～。寂しいー！もうこうなったらうち自ら外に出て、新たな眷属を作ってやるで――！」
そうしてロキファミリア主神であるロキは外へと向かった。
ロキが外門を通った直後、一人の美少年がこちらに向かって歩いているのが見えた。
（なんやあの子。なんか只者じゃない気がするなー。まあ、なんや、こっちに向かってるし話しかけてみるか）
「なあ自分」
「・ん、何ですか？」
「ああ、なんかうちの本拠地に向かってそうやったし声かけてん」
「え、ってことは貴方がロキ様ですか？」
「そやで～、うちがロキや。なんや自分うちのファミリアに入りたいんか～？」
「はい」
「おっ、即答。いい返事やで。じゃあついてき、案内したるわ」
案内された九鬼斗は大きな部屋へと連れて行かれた。
「今ちょうど眷属が欲しい思っとったんや、そこのベッドに背中見せるように寝っ転がってくれんか。今から恩恵を刻むから」
「分かりました」
そう返事し、九鬼斗はベッドへと寝っ転がった。
「じゃあ、恩恵付けるで～」

「よし、出来た！どれどれどんなステイタスやろな～」
天神　九鬼斗
種族：ヒューマン
ｌｖ１
力　　：Ｉ　０
耐久　：Ｉ　０
器用　：Ｉ　０
俊敏　：Ｉ　０
魔力　：Ｉ　０
『スキル』
『阿修羅の心』
９つの命を有する。ランクアップするごとに命が９つ増える。
死ぬたびに全ステイタスに超高補正。
『一方通行』
ありとあらゆるもののベクトルを操る。格上には効果が現れない。
『一撃男』
一撃一撃それぞれに力の高補正。一撃で敵を倒すと経験値が多くもらえる。
能動的行動に対するチャージ実行権。
『勇者』
何かを救うごとに全ステイタス少補正。早熟する。
『剣聖』
ありとあらゆる武具を使いこなす。
様々な加護を要する。
『剣聖の加護』『矢避けの加護』『矢当ての加護』『退魔の加護』『先制の加護』『闇避けの加護』『火避けの加護』『風受けの加護』『早駆けの加護』『泥抜けの加護』『湖の加護』『蒼天の加護』『涙天の加護』『伝心の加護』『騎乗の加護』『騎獣の加護』『無手の加護』『流血の加護』『不死鳥の加護』『霧の加護』『解毒の加護』『初見の加護』『再臨の加護』
精霊から好かれやすい。
『怪盗』

何かを盗むたびに器用と俊敏に高補正

『完成』

人の技術を見るだけで模倣できる。模倣したものを完成させ自分のものとする。

『選ばれし者』

他人から認められるほど全ステイタス補正。認められたものが神もしくは精霊の場合そのものに応じた加護がつく。早熟する。

『守護者』

誰かを守るごとに耐久に高補正。同じファミリアのメンバーの耐久にも高補正、仲がいいほどもっと互いに補正がかかる。

『発展途上』

ランクアップしたときに手に入る発展スキルを全て取ることができる。

『大嘘付き』

神にも嘘をつける。

『魔法』

『エレメンタル・フォース』

複合魔法。

単一魔法。

九つの魔法を複合、又は単一として扱うことができる。

効果永続魔法。

詠唱分『エレメンタル・フォース』

この詠唱を唱えた五分後まで九つの属性魔法を扱うことができる。

闇：『ヘル・マータ』

周りに黒い煙を出す。

黒い煙に居続けた者は身体能力が落ちていく。

火：『ファイア・フレイム』

火の弾を出す。

水：『バブル・ウォーター』

泡状の水球を魔力に応じた数を出す。

対象の相手にぶつかると軽い打撃程度の衝撃を与える。

泡が割れた時、半径１ｍ範囲の状況がわかる。
聖：『キュア・アーク』
一つの光の塊を出す。
魔力の消費量に応じて大きさ変動。
光の弾にいる者は少し回復する。
雷：『サンダー・ボルト』
雷を打ち出す。
形状は変幻自在。
魔力の消費量に応じて距離が変わる。
風：『ウィンド・ブレス』
強い風を打ち出す。
土：『サンド・アース』
地面が土の場合、形状を好きに変えることができる。
氷：『アイシクル・ヘイル』
氷の霧を打ち出す。
範囲は魔力に応じて変化する。
無：『エネルギー・ショット』
込めた魔力によって威力が変わる。
最大二分間魔力をチャージすることが可能。
『ショット』と詠唱された時にエネルギーの弾を打ち出す。
複合魔法：複数の魔法の詠唱分を掛け合わせることによって、二重属性の魔法を扱うことができる。
前後で分かれている詠唱分を別の詠唱と入れ替えると複合魔法が完成する。
この魔法は進化する。
『』
『』
「なんじゃこれ～～!!!!」
「えっ、そんなに驚くようなステイタスなんですか？」
「それもそうや。なんやこのスキルの量!?早熟するっていうのもよう

分からんし、っていうか名前天神ってあるけど、こんな馬鹿げたステイタスなんやからもしかして天神　竜馬の家系か？」
「ああ、はいおじいちゃんです」
「まだ生きとるか？」
「ええ、凄く元気です」
「そうか～、じゃないねん！こんなステイタスばれたら他の神々からいじられるようになんで、っていうか絶対ステイタスのことはばらすんちゃうで！いいか！」
「ばれたらまずいレベルなんですか？これじゃあおじいちゃんには敵わないでしょう。だったらまだまだです」
「はあ～まあ、とりあえずこれからうちの眷属なわけやけど九鬼斗ってよべばいいか？」
「ええ、それで構いませんよ」
「まあ、とりあえずこれから団長や幹部達に会わせるからついてきてなー」
　こうして九鬼斗は無事ロキファミリアへと入ることとなった。そして、これは彼が最強と呼ばれるようになる序章だ。彼は一体何を見出し、大切な者を作り、それを守れるのか。
　これは最強に成ろうとする一人の『眷属の物語』である。

第二話

「じゃあ、入ってもらうで～」
　そう言って連れられた先には、団長が使っている執務室に連れられ、その部屋には三人の冒険者らしき者達がいた。
「紹介するで～。真ん中に立っている金髪で小さい奴がロキファミリアの団長であるフィンディムナや。そしてその横にいる美人で、緑色の髪をしているのが、副団長でありハイエルフであるリヴェリア・リヨス・アールヴ。そして、残りの一人はドワーフで、幹部をやっとるガレスや。三人ともレベルは5で、第一級冒険者や」
「紹介ありがとうございます。では、三人をどう呼べばいいでしょうか？」
「そんなかしこまらなくていいよ、僕のことは団長か、フィン、と呼んでも構わないよ。それにしてもロキ、勝手に団員を増やさないでほしいな。どのような人物かは詳しくないんだろう？」
「まあ、そうやけど、九鬼斗はアイズたんを超える逸材という他ないで。このステイタスを見てみ」
　そうして、三人はステイタスに視線を落とした。
「「は？」」
「ふっ、これは確かにすごい逸材だ。これからよろしく。それと君の場合はすぐにでも幹部になるだろう。期待しているよ」
「ありがとうございます団長」
　フィンは団長と呼ぶのだと了承した。
「では挨拶が遅れたが、私も君のことは高く評価している。しかし、力だけがあってもダンジョンは攻略できない。これからは私が君にダンジョンに関する知識を与えよう。私のことはリヴェリアとでも呼ぶといい」
「分かりました。これから教わらせていただきます。リヴェリア」
「うむ、いい返事だ」
「では最後に儂じゃな。儂はフィンに比べたら少し時間に余裕があるからのう。御主には直接稽古をつけてやろう。ガレスとでも呼ぶが

いい」
「それは魅力的な提案ですね。おじいちゃんには勝てなかったですが、神の恩恵を手に入れたから、少しは同じ土俵にたてるような気がします」
「ん、君のおじいちゃんって一体何者なんだい？」
「天神　竜馬ですけど」
「「え～！」」
「な、驚いたやろ？」
「これは、彼のステイタスの異常さにも少しは納得できるね。天神なんて名前そうあったもんじゃないから、もしかしたらとは思ったけどあの『剣聖』の孫か～」
「恐らくこの『剣聖』というスキルもそこから来たのではないだろうか。あの人のことだ。戦闘技術は教えていたのだろう」
「がはは、これは凄い逸材が来たもんじゃの～」
　と順にフィン、リヴェリア、ガレスの感嘆の言葉。
「おじいちゃんってそんな有名だったんですか？」
「ああ、ものすごく有名だとも、レベル５の身で、推定レベル７のモンスターを単独で倒したという伝説を残した冒険者だからね。彼はまだ生きているのかい？」
「はい、元気に生きてます」
「それと、彼は君に剣技等の戦闘技術を教えたかい？」
「はい、おじいちゃんが持っていた全ての技術、奥義等も教えてもらいました。おじいちゃんには流石に勝てなかったけど、駆け引きや技の点だったら、僕の方が強いと思います。おじいちゃん以外にも武の神達に、武技を教わってマスターしましたから」
「本当にその年で規格外だね。まあ、なにはともあれ、これからよろしく九鬼斗」
「よろしくお願いします」
「これからは僕達三人で、君に必要なことを教えていこう。僕はリーダーとしてパーティーを率いる時に必要な技術を」
「私は先ほど言った通り、ダンジョンに関する知識を、そして魔法につ

いても教えてやろう。しかし、他にも教えている者がいるからその者と一緒にという形になる。この子とも仲良くしてやってくれ。君の方が少し年上だからな」
「儂はさっき言った通り、稽古を。時々、リヴェリアが言っていたあの子とも稽古をつけないといかんから、顔を合わせることも多いだろう、まあ、仲良くしてやってほしい」
「まあ、仲良くできるなら、仲良くしたいですけど」
　こうして九鬼斗の特訓は始まった。
　まず、ギルドへ行き冒険者登録を済ませ、持ち前の頭脳を活かし、リヴェリアからの教えも直ぐに理解し、一週間の間に『下層』までの情報も完全に把握した。この一週間の間に九鬼斗はある金髪の可愛い子とも話し合う中となった。名はアイズという。彼女は九鬼斗に聞いた。
「何故そこまで、学習能力が高いの？私にはそこまで早く学べる自信がない。リヴェリアもテストで一定以上の点数を取らないとダンジョンに行かせてくれないし。何か早く学ぶコツでもあるの？」
「いや、まあこれは今までも色々なことを学んできたから、自然的に学ぶのが早くなったんだ」
「そうなんだ・・」
「まあ、アイズも頭の回転は早いんだし、もうすぐダンジョンに潜れるようになるさ」
「むぅ～分かった」
「よしよし」つ　ナデナデ
「／／／」
「いつかダンジョンに潜れるようになったら一緒に行こうぜ」
「うん」
「じゃあ、僕はフィンのところに行かないといけないから」
　九鬼斗はスキルの『完成』の効果と、元々持っていた学習能力の高さですぐにリーダーシップをとり、仲間に適切な指示を出すことも可能となっていた。

ガレスとの稽古では、流石に勝てはしないものの善戦することもたまにある程には強くなっていた。そうして、三人からの教育指導を一ヶ月続けた結果、九鬼斗はパーティーリーダーの能力を開花させ、ダンジョンに関する知識においては深層のことまで知っており、闇派閥のことや、ダンジョンにこれまで起きた異常事態、神聖文字（ヒエログリフ）の解読すらも可能となっていた。そんな彼を見て、ロキや団長達三人もダンジョンに潜る許可を出した。

「にしてもダンジョンに潜る前に更新したったけど、早熟するってこういう意味やったんか～」

天神　九鬼斗
種族：ヒューマン
lv1
力　　：C　654
耐久　：C　671
器用　：A　879
俊敏　：B　701
魔力　：D　431

「普通は、一級冒険者に鍛えてもらった言うてもここまでにはならへんねんけどな～。ほんま末恐ろしいわ」

――ギルド

「エイナさ～ん」
「あら、九鬼斗くんじゃない。どうしたの」
「いえ、これから初めてダンジョンに潜るので、挨拶にと」
「え、単独で潜るの？だめでしょ！せっかく強い仲間がいるんだから、一緒にいけばいいじゃない。規模だってでかいから、一緒に行く人もいるでしょ？」
「あの～、僕ステイタス全てC以上なんですけど」
「へ？嘘でしょ？」
「なんだったら背中見せましょうか？神聖文字って読めます？」

「いや、そこまでいうんだったら嘘じゃないんでしょ。わかりました。ダンジョンに潜る許可を出します。だけど、潜る前にダンジョンに関する知識は覚えっててもらうわよ」
「いえ、もうリヴェリアに教えてもらったので大丈夫です」
「えっ、リヴェリア様に？はぁそれだったら文句はないわね。じゃあ九鬼斗くん私から一言。良い？『冒険者は冒険をしてはいけない』の。死にさえしなければ幾らでもチャンスはあるんだからね」
「・・分かりました。肝に銘じておきます」
「本当～？なにか間があったような気がするけど」
「気のせいだと思いますよ」
「はぁ、全くもう、いってらっしゃい」
「はい、いってきます」

――ダンジョン一階層
「ここが一階層か。大したモンスターはいなそうだな」
実際、九鬼斗にとってここのモンスター達は弱すぎた。ダンジョンの構造も全部頭にあるため、一切問題がなかった。一回、群れのゴブリンに襲われたが、何の問題もなく倒せた。
「もっと先に進むか」

――ダンジョン二階層
コボルト・ゴブリン「ギャッ」

――三階層
コボルト・ゴブリン「ギャッ」
――四階層
コボルト・ゴブリン「ギャッ」

――五階層
コボルト・ゴブリン「ギャッ」

――六階層
ウォーシャドウ「グッ」
――七階層
キラーアント・パープルモス「ギー！」
沢山のキラーアントが襲ってきたが、スキル『一撃男』の能力で一撃に向かって力をチャージし、思いっきり自分が持ちうる、全力の一撃を放った結果、全滅した。
「まだまだ、先にいけるな」
――八階層
以下略

――九階層
以下略
――十階層
トロール「ギャッ」
――十一階層
以下略
――十二階層
「ここが上層最後の階層か・・・。ここでも相変わらず何も変わらないな。流石にこれ以上進むと怒られそうだし、戻るか」
その時、あるモンスターの声と冒険者の悲鳴が聞こえた。

「ぎゃー、助けてくれー！こんなところにインファントドラゴンがいるなんて聞いていないぞ。しかも二体もいるなんて！」
その声を聞いた九鬼斗は、他の冒険者達が逃げ回る中、インファントドラゴンに向かって走った。チャージをしながら・・・
「どけー！今から僕があのインファントドラゴンを片付ける！」
そう言って九鬼斗はギルドから支給されたナイフを持った。
「エレメンタル・フォース」
九鬼斗はリヴェリアにこの魔法はとても希少な魔法だと言った。
リヴェリア自身も九つの魔法を扱うことで有名だが、それは三つ全

てのスロットを用いての話で、詠唱も長いものばかりだ。それに比べ、九鬼斗の魔法は不思議な点があった。複合魔法と書かれていたのだ。丁寧にどのように複合するのかも書かれて。そして、九鬼斗はこの魔法の有用性に気がついた。これは付加魔法にもなるのではないかと。詠唱を始めだけを詠むことによって。
「ファイア」そう詠唱すると火が出てきた。そしてその火をナイフに付与した。
　そして、チャージした力を火に移し、火はナイフの大きさまで変えた。もはや長剣とも言える長さの火の剣となったそれは、インファントドラゴンに向かって放たれた。
『火剣!』そう叫び、その火の刃を二体のインファントドラゴンに放った。
　その結果、見事に二体のインファントドラゴンは一刀両断に焼き切られた。
「実験した甲斐があったな」
　周りの冒険者達は唖然とした。
「さてそれじゃあ魔石を集めるか」
　といいもうすでにパンパンなポーチの中へと魔石を入れるのだった。
「なんか、無限に物を入れられるようなものがあればいいのになー」
　とだけ、文句を零し、帰路へと着いた。
　ダンジョンから戻った時には修羅の顔をしたエイナが待っていた。
(えっ、別に怒られるようなことをした覚えはないぞ)
「ど、どうしたんですかエイナさん?可愛い顔が台無しですよ」
「そんなお世辞はいいからそこに座りなさい」とこれまでのモンスターよりも圧倒的に怖い気配を感じ、大人しく言うことを聞いた。
「で、九鬼斗くん何で十二階層まで潜ったのかな~?冒険者は冒険してはいけないって言葉もう忘れちゃったの~?」
「覚えていますって。だから中層にはいかなかったじゃないですか」
「十二階層まで潜ることを冒険しているっていうんだよ~~!!」
「でも、インファントドラゴンも僕の相手ではありませんでしたよ」

「問答無用～！それにまともに揃っていない装備でそこまで潜ること自体がおかしいのよ～！明日はダンジョンに潜ることを禁止します！そして、私と一緒に装備を買いに行くわよ。良い?!」
「あ、はい」
　その後とりあえず魔石を換金しに行った九鬼斗は合計８万７８００ヴァリスを持ち、本拠地へと帰った。
「はぁ～もっと深くに潜りたいんだけどな～。まぁ、でも付加魔法を戦闘中にも付けられたから、まだいいか。それと僕自身にも物作りがしたいから発展スキルの『神秘』欲しいな～。そしたら嘗て読んだ英雄記で出てきた英雄の中の英雄ギルガメッシュの『王の財宝』みたいなのをつくるんだけどな～。あ、それをつくるとしたら自分でも伝説級の武具を作らないとな～。よ～し、当分の目的はこれにするか～！」
　その後、初めてのダンジョン帰りで、当分の目的が出来、上機嫌な九鬼斗の前にまたしても修羅の顔をしたエルフに怒られることとなった。
「九鬼斗、私は慢心はするなと言ったはずだぞ。何故十二階層まで行った」
「何で、皆そのことを?」
「大きなニュースになっているぞ、ロキファミリアの期待のルーキー。初のダンジョンで十二階層！とな」
「誰がその情報を」
「貴様を見た、上級冒険者がそう証言したそうだ」
「くっ、周りの目には気をつけるべきだったな」
「では、説教といこうか」
「い、いや、もうさっき同じことでギルドアドバイザーに怒られたから勘弁してください」
「む、それはよかったではないか。これで二度とすることも無くなるだろう」
「許してくれ～説教はもうこりごりだー！」
「問答無用！」

そして、リヴェリアに連れられた九鬼斗は何故か、アイズにも説教をされることとなった。説教が三時間程あった後、九鬼斗は精神がぼろぼろの状態で、ロキの部屋へと向かった。
「ステイタスの更新を頼む」
「また、こっぴどくやられたな。ええで、コッチ来―」
「どれどれ、ふっ、もう驚くのを通り越して、頭痛くなるわ」

ｌｖ１
力　　：ＳＳ　　１０２４
耐久　：Ｓ　　９６４
器用　：ＳＳＳ　　１２９８
俊敏　：ＳＳ　１１１３
魔力　：Ｓ　　９９８

『魔法』
『エレメンタル・フォース』
複合魔法。
単一魔法。
九つの魔法を複合、又は単一として扱うことができる。
効果永続魔法。
詠唱分『エレメンタル・フォース』
この詠唱を唱えた五分後まで九つの属性魔法を扱うことができる。
闇：『ヘル・マータ』
周りに黒い煙を出す。
黒い煙に居続けた者は身体能力が落ちていく。
火：『ファイア・フレイム』
火の弾を出す。
水：『バブル・ウォーター』
泡状の水球を魔力に応じた数を出す。
対象の相手にぶつかると軽い打撃程度の衝撃を与える。
泡が割れた時、半径１ｍ範囲の状況がわかる。
聖：『キュア・アーク』

一つの光の塊を出す。
魔力の消費量に応じて大きさ変動。
光の弾にいる者は少し回復する。
雷：『サンダー・ボルト』
雷を打ち出す。
形状は変幻自在。
魔力の消費量に応じて距離が変わる。
風：『ウィンド・ブレス』
強い風を打ち出す。
土：『サンド・アース』
地面が土の場合、形状を好きに変えることができる。
氷：『アイシクル・ヘイル』
氷の霧を打ち出す。
範囲は魔力に応じて変化する。
無：『エネルギー・ショット』
込めた魔力によって威力が変わる。
最大二分間魔力をチャージすることが可能。
『ショット』と詠唱された時にエネルギーの弾を打ち出す。
複合魔法：複数の魔法の詠唱分を掛け合わせることによって、二重属性の魔法を扱うことができる。
前後で分かれている詠唱分を別の詠唱と入れ替えると複合魔法が完成する。
第一節の魔法だけ唱えると付加魔法となる。
この魔法は進化する。

「魔法も少し変化しとるで～。というか魔法が進化するって聞いたことがないわ！ほんま規格外やな。たった一ヶ月とちょっとでこんなステイタスになるやつはおらんで」
「まあ、僕は今ある大きな目標があるので、これからはダンジョンに潜る以外にも武器とか便利な道具を作って、発展スキルで『神秘』や『鍛冶』を取りたいと思っています」

「九鬼斗やったらできそうやから怖いな。まあ、頑張ってな～！」
「はい」
こうして、九鬼斗の『王の財宝』を作る計画が開始された。

第三話

九鬼斗の『王の財宝』を作る計画が開始された直後、九鬼斗は約束通りエイナの元へ行き、一緒に装備を買いに行くこととなった。
「じゃあ、まずは気に入りそうな武器を見つけるためにヘファイトスファミリアのお店に行こうか」
「はい、あの安く売られている方ですよね」
「うん、まあそうね。まだ上級鍛冶士じゃない人達の作品が売られているところね。あそこは比較的に買いやすいリーズナブルな商品が売られているからね」
――ヘファイトス武具店
「じゃあ、とりあえず自分の好きなものを選んでね。お金はどれくらい持ってきてるの？」
「十万ヴァリスぐらいです」
「だったら結構いいのも買えるわね」
そうして九鬼斗は店を回っていると、一つ興味深いものが置いてあるのが見えた。
（ガントレットか・・。値段も９万９０００ヴァリス、これを買ったらお金も無くなってしまうけど、これは欲しい。そして、これを『神秘』をとったときにこれをモデルとして、高性能で便利な機能が付いているガントレットを作ろう。うんそうしよう。え～と、作成者の名は椿・コルブラントか）
「エイナさ～ん。僕これにします」
「えっ、それってガントレットじゃない！それじゃあ、全身を守れないでしょう!?だったらフル・アーマーがいいと思ったんだけど、まあそれを気に入ったんだったら、それを買った方がいいわね」
「ありがとうございます。あと、僕は相当のことがないと傷一つつきませんよ。そういうスキルがあるんで」
「そ、それを先に言ってよ～！」
と顔を赤くさせながら言った。
「すいません」

（スキル『一方通行』は本当に便利なスキルだけど、演算能力がなかったら使い物にはなっていないな。最近、ありとあらゆることを反射できると分かって、戦闘時とかはずっと反射できるようにしてるけど、これ日光とかも反射するんだよな。そのせいで髪が段々と白くなってきたぜ。）

今の九鬼斗の髪の色は黒と白が入り混じった感じになっています。しかし、周りの人からみればオシャレ程度に感じるぐらいの髪色になった。

（その内、神秘の力でベクトル操作をうまいこと助長させてかつ、軽く、そして動きやすい防具も作ろうかなー！）

段々と夢膨らます九鬼斗であった。

そして、いい感じのガントレットを買ったあとは、エイナと九鬼斗は一緒にデートみたいな形でカフェなどに行ったりした。そして、エイナとの約束を終えると、またすぐにダンジョンへと潜った。

今回は七階層まで行き、キラーアントを大量におびき寄せ、魔法に対して力をチャージし、キラーアントの弱点である火を魔法の一つである、『ファイア・フレイム』で打ち払った。そうして手に入れた大量の魔石を、持ってきていた大きなバックパックいっぱいに詰め、換金しに行き、１２万ヴァリス手に入れた九鬼斗は物を作るのに必要なのを買い揃えるために全額支払った。

そうして、言われた通り、あまり深くまで潜らず、七階層まで行き、キラーアントの群れを倒して、倒して、倒しまくり、１日に十回ほど往復を繰り返し、その都度魔石を換金していた。そして、稼いだお金を全部見本となりそうな物を買ったり、材料を集めたりするのにつぎ込んだ。

そのようなことを一ヶ月間ずっと繰り返した結果、九鬼斗自身満足できる道具や、装備を作るのに成功した。例えば、バックパックの代わりに使える、服に大量に魔石を入れるために内側にも外側にも大量にポケットを付けた頑丈な服を作ったりした。色々な物を発明、作っている間にもステイタスの器用は上がっており、キラーアントを倒すときにも経験値は大量に手に入るため、ステイタスもすごいことに

なっていた。そして、九鬼斗はもうこれほどで十分だと感じ、ランクアップに必要である偉業を達成するべく又ダンジョンへ潜ることとなった。

この期間にアイズもダンジョンに潜る許可をもらい、冒険者としての活動もしていた。アイズも九鬼斗程ではなかったが、早い段階で成長していた。

アイズの同年代である、アマゾネスのティオネ、ティオナと一緒にダンジョンに潜っていると、九鬼斗は聞いていた。

九鬼斗は同じファミリアの人からは少し変な奴というイメージを持たれていた。

団長達には特別に指導してもらったりしているのに、ダンジョンにはそこまで潜らず物作りに没頭しているところを評価されたのである。九鬼斗のステイタスの秘密を知っているのはロキ、フィン、リヴェリア、ガレスと四人だけなので、誰も九鬼斗が特別な理由を知らないため、嫉妬を覚える者もいるほどであった。

そう思われていることは知っていた九鬼斗だったが、一切そのことは気にしなかった。そんなことを気にするぐらいだったら、強くなった方が有意義だからだ。

九鬼斗が十分にランクアップに必要な条件は満たしていたため、残るは偉業を達成するだけとなった。それから、九鬼斗はエイナには内緒で中層にも行くようになった。

そして、偉業を達成する日がやってきた。

――十五階層

「う～ん、流石にここら辺からは単独では少しきついな」

(レベル2相応のモンスターも、うじゃうじゃいるしな。まあ、まだ一体だけなら加護もあるから断然大丈夫だけど)

そんな余裕を持っていた彼に悲劇が訪ずれる。

あるファミリアのパーティーだろうか、それらが大量のモンスターを背に連れ、逃げていた。それに九鬼斗が気がついたときには遅く、九鬼斗は大量のモンスターを押し付けられてしまった。レベル2の冒険者もいたであろうパーティーを壊滅寸前まで追い詰める程のモ

ンスター達だった。単独の九鬼斗では対処がとても難しかった。
「ちっ、押し付けられたな。流石にこれはやばい。死ぬことも覚悟しないとな」
そして、九鬼斗は多対一の時に有効な戦闘技術を駆使して戦った。
敵同士が殺し合うように仕向けたり、一体のモンスターに火種をつけて、周りのモンスターにも火を押し付けさせたり等のこともした。しかし、ミノタウロスの群れが一番きつかった。大半のモンスターはベクトルを操作して、石を投げつけるだけで済むものを、ミノタウロスの耐久では耐えられてしまった。更に、倒したモンスターの魔石を喰らうものまで現れた。そして、九鬼斗はそのことだけに気を配ることはできず、ただひたすらに、眼に映るものを切りまくった。支給品のナイフがここまで持っていたのは九鬼斗の武器の扱いの上手さだろう。しかし、そんな彼でも一切消耗させないということなどできるはずもなく、遂にはナイフを折られてしまった。魔法も沢山使った。自分自身に付加魔法をかけ、地力も上げた、モンスターの攻撃も、武器を失った中でも徒手空拳でいなし続けた。しかし、そんな戦闘にも限界はきた。魔法の行使による、精神疲弊（マインドダウン）にも陥り、自分で強化したガントレットで上手く防いでいても、傷は増えていった。反射するのに使う演算能力も頭を疲弊させ、九鬼斗を限界の状態にした。反射できない攻撃もあった。そして、他のところからもくる、モンスターもほとんど全て殲滅させ、残ったのはこの混乱に乗じ、魔石を大量に喰らったミノタウロス一匹となった。
「はあはあ」（頭がくらくらする。視界がぼやける、確かあいつは魔石を食っていた『強化種』！これはもうダメかもな）
そう思った時には、強化種であるミノタウロスは、保持していた天然武器（ネイチャーウエポン）を使って九鬼斗を一撃で殺した。
ミノタウロスは歓喜した。この化け物を倒したと。魔石を大量に食べ、強くもなったと、ミノタウロスは自身の全能感に酔いしれた。そして、その場から去ろうとした、その時誰かが立つ音が聞こえた。振り返ると、その化け物が立っていた。傷を負っていた体はもう、全快していた。ミノタウロスは驚愕した。自分は確かに倒したはずだ

と。しかし、その者は立っていた。光を拳に宿して。
（本当に死んだと思ったぜ、これは恐らく『不死鳥の加護』のおかげだな。スキル『阿修羅の心』っていうやつは発動した感じはしないな。多分、先に『不死鳥の加護』が発動したんだろ。だけど、次死んだ時は恐らく『阿修羅の心』が発動するだろうな。まあ、その後はまた『不死鳥の加護』も新しく付くだろうしな。合計１７回俺は生き返ることができる状態だな。ランクアップしたら更に生き返る回数も増えるとか、本当に僕のスキルは有能すぎる気がするな。まあ、いい、とりあえず今はこいつを倒すことだけを考えろ。こいつは駆け引きや技に関しては素人同然、ただ、力があるだけだ。だったら倒せない通りはない。スキルのおかげでステイタスも高くなっているはずだしな）
「さあ、行くぞ！ミノタウロス！」
『ウォーー!!』
「咆哮なんて効くかー！『エレメンタル・フォース』『ヘル・マータ』」
煙を出し、警戒させる、そして視覚をつぶす。
次だ
『サンダー・ボルト』！
一直線に早い雷が打ち出され、ミノタウロスに当たる、
『ウ、ウォー！』
ミノタウロスはこんなものびくともしないという様に体を張る。
「っち、効かねえか。だったら『ファイア・ボルト』！」
複合魔法の一つであるファイア・ボルト。無詠唱であり、威力が高い、魔法の組み合わせの一つである。爆雷がミノタウロスに襲い掛かるが、ミノタウロスはその爆煙に突っ込み、九鬼斗にタックルをかました。
九鬼斗は受け身をとったので、重症は避けたが、それでも中々に響いた。
モンスターならではの戦い方は、九鬼斗を苦しめた。予測が難しく、一回でも直撃を食らえば死ぬという、死を直面させられているような感覚、九鬼斗はこの時初めて冒険をした。
『ファイア・ボルト』『ファイア・ボルト』『ウインド・ブレス』『エネ

ルギー・ショット』と色々な早い攻撃魔法を連発し、ミノタウロスの動きを止めていた。
（ここまで効かないなんて、なんていう耐久力だ。・・こうなったら、力を拳に込めて、内側から魔法で消しとばしてやる）
（力を込めろ、相手に感づかれないように）
九鬼斗は左手から魔法を放ち、右手に、ばれないよう力をチャージしていた。
このまま時間稼ぎをしていれば勝てると踏んだ九鬼斗。
ミノタウロスは少し、攻めあぐねていることに焦りを覚えた。だからミノタウロスは天然武器の棍棒ではなく、己が持つ、最大の武器、頭に生えているツノを相手に突き刺すと決めた。魔法に対しても、自慢の耐久があれば大丈夫だと踏んだ。
それぞれの思惑が入り混じる中、九鬼斗が魔法を放ち続けているだけの状態に変化が起きた。
『ウォーーー!!!』
叫びながらミノタウロスは１５ｍ程あった距離を縮めてきた。
（な!?くそ２０秒だけだが、やるしかない！）
九鬼斗は力を込め、己が放てる最大の一撃を打つために構えた。
対するは猛攻するように魔法の中を突き抜け、ツノで相手を倒さんとするミノタウロス。
そして、両者の必殺の一撃がぶつかった・・
と思いきや、九鬼斗はツノが拳と当たる直前に屈むようにして回避した。これがモンスターには無い駆け引きの差であった。回避され、己の体を無防備に晒したミノタウロスに繰り出されるは、必殺に一撃。
九鬼斗は全力で拳を振るった。その拳はミノタウロスの体を貫いたかのように見えたが、内部のところでとどまった。ミノタウロスは好機だと思った。激痛の中、見えた勝ち筋を信じて、疑わず、相手の無防備な背中にその大きな腕を振るおうとした矢先、九鬼斗は自分が持つ、最大威力の魔法を詠む。
『サンダー・フレイム』『サンダー・フレイム』『サンダー・フレイム』

これこそが威力特化の複合魔法だった。これは射程はそこまでなく至近距離でしか放つことができない。しかし、威力は『ファイア・ボルト』三発分ほどの威力だった。その魔法をミノタウロスの体内で放った結果、ミノタウロスはその腕を振るうことはできず、体を雷炎で焼きつくされ、細胞という細胞を雷で壊された。そしてミノタウロスは魔石と大きな灰を残し、倒された。その場には一本の大きなツノも残されていた。

この戦闘の後、九鬼斗は自ら調合し、作ったポーションを使って回復し、最後は無事に本拠地へと帰った。普段通りの時間、そして相変わらず無傷な自分を見せ、帰宅したが、扉の前にはフィン、リヴェリア、ガレスがそれぞれ、笑っているようで実はものすごく怒っている怖い顔、修羅の幻がみえるほど冷徹な顔をして怒っている、とても険しい顔、といった三者三様の様子を見せた後、九鬼斗は無言で団長室まで連れて行かれた。

(何故バレた!?)

「何故バレたっていう顔をしているね九鬼斗」

「!?」

「貴様の情報は、モンスターを押し付けてしまったパーティーの奴らに聞いた。かなりの数を無傷で、しかも推定レベル2のモンスターも多くいたモンスターパレードを倒せたとでもいうのか?それと逃げた等という嘘はつかさんぞ。はぁ、全く貴様が持つ、『大嘘付き』のせいでロキが嘘だと見抜けないのは残念だが、今回はことを隠し通せると思うなよ」

「もう、おとなしく吐いておけ。そうすれば少しは説教も短くなるぞ」

「はい」

そして、九鬼斗は大人しく全てを話した。一回死んだことや、倒したモンスター達の魔石を食べて強化された、強化種のミノタウロスと対峙し、倒したことも。

これらを全て語った後、九鬼斗はこれからどんな長い説教をされるかということに、恐れていた。

しかし、リヴェリアはその話を聞いて「そうか」と返事をし、優し

い顔をして、
「私達に頼ってもいいのだぞ。何を一人でそこまで抱え込む？私達にも少しはその重荷を一緒に背負わせろ。それが家族というものだ」
　それを聞いた九鬼斗は思わず、泣き出してしまった。どれほど強いといっても年齢はまだ１３歳。子供である。そんな彼は実の親にも見せなかった、幼稚な部分を、リヴェリアに見せた。そんな彼を見て、ロキ、フィン、ガレスはリヴェリアが九鬼斗を抱き、慰めているのを優しい目で見守った。
　三十分程泣いた後、九鬼斗は急に恥ずかしい思いはこみ上げ、顔を赤くした。
「それにしても九鬼斗もあんな部分があったんだね」
「ああ、とてもかわいらしかったな」
「がはは、まだまだ子供ということじゃわい」
「そうやな、にしても九鬼斗、自分目の色変わってへん？」
「え？」
　元々九鬼斗の目の色は両目とも黒だった。だが、今は左目が蒼色で、右目が緋色となっていた。
「うーん、一回死んだ影響かな？まあ、ええわ、ステイタス更新すれば分かるやろうしな。じゃあ更新しようかー」
「分かった」
「どれどれ、ってやっぱりそうなるか。ランクアップおめでとう九鬼斗」
　天神　九鬼斗
　種族：ヒューマン
　ｌｖ２
　力　　：Ｉ　０
　耐久　：Ｉ　０
　器用　：Ｉ　０
　俊敏　：Ｉ　０
　魔力　：Ｉ　０
『スキル』

『阿修羅の心』
９つの命を有する。ランクアップするごとに命が９つ増える。
死ぬたびに全ステイタスに超高補正。
命の数：１８
『一方通行』
ありとあらゆるもののベクトルを操る。格上には効果が現れない。
『一撃男』
一撃一撃それぞれに力の高補正。一撃で敵を倒すと経験値が多くもらえる。
能動的行動に対するチャージ実行権。
『勇者』
何かを救うごとに全ステイタス少補正。早熟する。
『剣聖』
ありとあらゆる武具を使いこなす。
様々な加護を要する。
『剣聖の加護』『矢避けの加護』『矢当ての加護』『退魔の加護』『先制の加護』『闇避けの加護』『火避けの加護』『風受けの加護』『早駆けの加護』『泥抜けの加護』『湖の加護』『蒼天の加護』『涙天の加護』『伝心の加護』『騎乗の加護』『騎獣の加護』『無手の加護』『流血の加護』『不死鳥の加護』『霧の加護』『解毒の加護』『初見の加護』『再臨の加護』
精霊から好かれやすい。
『怪盗』
何かを盗むたびに器用と俊敏に高補正
『完成』
人の技術を見るだけで模倣できる。模倣したものを完成させ自分のものとする。
『選ばれし者』
他人から認められるほど全ステイタス補正。認められたものが神もしくは精霊の場合そのものに応じた加護がつく。早熟する。
『守護者』
誰かを守るごとに耐久に高補正。同じファミリアのメンバーの耐

久にも高補正、仲がいいほどもっと互いに補正がかかる。
『発展途上』
ランクアップしたときに手に入る発展スキルを全て取ることができる。
『大嘘付き』
神にも嘘をつける。
『王の財宝』
異次元の空間を操る。
異次元に通ずる門を無数に出すことができる。
その異次元にあるものを門から射出、又は抜き取る事ができる。
現界のものを入れることが可能。
門を開くのは、意識的にすることができる。
異次元にあるものはその状態を永続的に保存する。
門に手を入れ、中に入っているものを望めば手元に来る。
手を入れずとも射出状態に待機させることもできる。
入れられるものに限界はない、しかし、生物は入れられない。
『未来視』
未来を視ることができる。
先の未来を見るほど精神力（マインド）の消費量が増す。
任意発動。（アクティブモーション）
視える未来の先に限界は無い。
『過去視』
過去を視ることができる。
遠い過去を見るほど精神力（マインド）の消費量が増す。
任意発動。（アクティブモーション）
視える過去の先に限界は無い。

『魔法』
『エレメンタル・フォース』
複合魔法。
単一魔法。

九つの魔法を複合、又は単一として扱うことができる。
効果永続魔法。
詠唱分『エレメンタル・フォース』
この詠唱を唱えた五分後まで九つの属性魔法を扱うことができる。
闇：『ヘル・マータ』
周りに黒い煙を出す。
黒い煙に居続けた者は身体能力が落ちていく。
火：『ファイア・フレイム』
火の弾を出す。
水：『バブル・ウォーター』
泡状の水球を魔力に応じた数を出す。
対象の相手にぶつかると軽い打撃程度の衝撃を与える。
泡が割れた時、半径１ｍ範囲の状況がわかる。
聖：『キュア・アーク』
一つの光の塊を出す。
魔力の消費量に応じて大きさ変動。
光の弾にいる者は少し回復する。
雷：『サンダー・ボルト』
雷を打ち出す。
形状は変幻自在。
魔力の消費量に応じて距離が変わる。
風：『ウィンド・ブレス』
強い風を打ち出す。
地：『サンド・アース』
地面が土の場合、形状を好きに変えることができる。
氷：『アイシクル・ヘイル』
氷の霧を打ち出す。
範囲は魔力に応じて変化する。
無：『エネルギー・ショット』
込めた魔力によって威力が変わる。
最大二分間魔力をチャージすることが可能。

『ショット』と詠唱された時にエネルギーの弾を打ち出す。
複合魔法：複数の魔法の詠唱分を掛け合わせることによって、二重属性の魔法を扱うことができる。
前後で分かれている詠唱分を別の詠唱と入れ替えると複合魔法が完成する。
この魔法は進化する。
『』
『』
『発展アビリティ』
創造者Ｉ　神秘Ｉ　狩人Ｉ　祝福Ｉ
「とりあえずそれがランクアップした時のステイタスな。それと発展スキルは全部良さそうなもんやったし、全部取っといたで」
「ありがとうございます」
「んで、これがランクアップする前のステイタス」
ｌｖ１
力　：ＳＳＳ　１９８０
耐久　：ＳＳＳ　１８７６
器用　：ＳＳＳ　２１９６
俊敏　：ＳＳＳ　１７８９
魔力　：ＳＳＳ　１３２１
「大分経験値が溜まっていたし、恐らく今でもｌｖ２の最上位ぐらいのポテンシャルやと思うで。というかランクアップまでの所要期間３カ月ってやばすぎちゃう」
ステイタスを見て九鬼斗は歓喜した。
得に新たなスキル『王の財宝』に。これで自分が待ち望んでいたことができるようになったのだ。今の所中身が無いので、これから補充していく形にはなるが、発展スキルである、創造者と神秘は恐らく秘宝を作るのにはうってつけのものだろう。更に魔石も王の財宝の中に入れておけば、恐らく持ち運びをする必要がなくなるだろう。試しに重たいものを入れてみたが、それはすんなりと入り、自分が持っているという感覚もなかった。つまり重さも一切関係無いということ

だった。
　これならば自ら、最高の武器を作り、王の財宝に入れれば、かの英雄王ギルガメッシュと同じことができると喜んだ。
　それから九鬼斗は、フィンたちにダンジョンに潜ることを禁止されたが、それならと思い、フィンたちに精製金属（ミスリル）を初めとした、貴重な材料を使わせて欲しいと頼んだ。フィンはそれで強い武具や、貴重なマジックアイテムが手に入るならばと思い、ロキファミリア秘蔵の倉庫から好きなだけ材料を持ち出して良いと言うと、九鬼斗はまずそれら全てを王の財宝の中に入れ、自分の部屋にこもって、色々な武器や、マジックアイテムを作った。創造者というのは『神秘』を除く生産系発展スキルの総括版だった。実際、武器に火炎属性を付けることも可能であり、調合のスキルらしき効果も感じた。様々なものを更に奥深く作ることができるということは九鬼斗を楽しませた。
　凄まじい長さであり、第一級冒険者や『深層』の階層主であろうと壊すことが叶わ無い不壊属性を持った鎖を作ったり、ベクトル操作を助長し、その能力を活かしたりするための、自分ではなく、機械で演算を全て任せるべく、人工知能が搭載されているチョーカーを作った。そのチョーカーもまた不壊属性であり、人工知能は適切な判断をこなし、必要な時にベクトルを操るよう、指示するように出来ている。
　防具に関しても、自分に一番合うものを作り、それもまた不壊属性であり、ありとあらゆる属性に対する耐性がついている。フル・プレートみたいな形だが、関節はちゃんと動くよう設定されている。衝撃を吸収し、その衝撃をガントレットに移し、その衝撃を相手に放つこともできるようになっている。ガントレットには小物が入るようなスペースがあり、そこからはナイフ等が射出されるようになっている。魔法を食らった時も、その魔法を吸収する機能もついている。許容できないほど吸収されれば、それを排出するよう設定されている。しかし、かなりの量は吸収し、貯めることができる。魔力を使って、ジェット噴射をしたり、その魔力を自分の魔法の行使のためにも使ったりするようになっている。魔力を使って、防具の耐久力をあげたり、回復させたりこともできるようになっている。他にも、自分の気

配と姿を消す、ハデス・ハットや、魔力をそのまま発射するアイテムも作ったりした。少し、作りすぎだと思えるくらいに色々作っていた九鬼斗は、足りない材料を買うために、失敗作のマジックアイテムを販売した。その結果、数千万ヴァリスもお金が手に入ったので、それらを使って、新たな効果のポーションを作ったりもした。もはや、作りすぎとも言える九鬼斗に、やめろという者はいなかった。リヴェリア達は、好きなことに没頭している子供を、止めるわけにもいかないと思い、そして使い勝手が良いマジックアイテムも沢山作ってもらっているため。文句も言えなかった。ランクアップしてから、ダンジョンにも一切潜らず、ただひたすら物作りをしていた九鬼斗は、半年もの間物作りにだけ没頭し、部屋の外を出る時は材料を買う時や、シャワー、そして食事を取る時だけだった。更に九鬼斗は睡眠も全然取っておらず、作業がはかどらない時ぐらいにしか睡眠しなかった。

そうして半年の間に完成したマジックアイテムは百を優に超え、九鬼斗は自らの目的の物も全て完成させ、フィン達にあげたのはあくまでスペアで、完成品は全て王の財宝の中に入っていた。普通に良い剣も、射出するために大量に作られていた。しかし、本当にただの剣では、九鬼斗は納得しなかったため、全ての剣は魔剣のような能力を有していた。しかし、それだけでは数が目標の数にならなかったため、失敗作のマジックアイテムも大量にあったため、それらを売り、それでも十分効果を発揮するものばかりだったため、多少ボッたくっても買う者はいた。そうして手に入れたお金の一部は、ロキファミリアの資産にしたが、それでも余りある数億ヴァリスはヘファイトスファミリアとゴブリュファミリアにある、普通の値段から高い値段帯のものまで買い漁るために使った。一時、このせいで、剣の値段が高騰したこともあるほどだった。こうして、大量の剣も手に入れ、自分では作れないであろう、武器は神に直接オーダーメイドで作ってもらった。

この結果、九鬼斗はレベル2にして億万長者であり、最強の武具、そして防具を手に入れた。

この頃には九鬼斗の二つ名も決まっていた。

『神才の発明者』

彼が作ったものに対する評価から来たものだった。
九鬼斗はその後リハビリがてら、ダンジョンにまた潜るようになった。
そして、自分で作ったもの全てを完璧に扱うために朝早くから夜遅くまで練習していた。それからまた半年後、九鬼斗はランクアップを果たした。彼が作ったマジックアイテム、災害を巻き起こす天災剣エアで18階層の階層主であるゴライアスを一撃で倒したのである。九鬼斗はそのエアを普通に剣としての性能を確かめるために潜っていたのだが、十七階層にゴライアスがいることを知り、最大威力を確かめるべく、エアが放てる最大威力、嵐を巻き起こし、それをゴライアスにぶつけると一撃で灰となった。そして、これが、自分で作った武器で階層主を一撃で倒したということを偉業として判断され、ランクアップを果たした。
こうして自分が望むものを全て手に入れた彼は、オラリオに来た当初の目的である大切な人を作るということを目的とした。そして、彼はロキファミリアのメンバーこそがそうだと思っていた。最近は話していなかったが、アイズも大切な人の一人だ。フィン、リヴェリア、ガレスも大切な人だった。
それからというもの、九鬼斗はフィンに正式に幹部になってほしいと頼まれ、幹部となり、下の者を支えるようになった。レベル3になって魔道の発展スキルも発現したため、魔道書すらも作れるようになっていた。自分が持つ力を活かして、遠征に行くためのお金や、資材を自ら蓄えたりもした。遠征に行くメンバーのためにマジックアイテムを作ったりもした。しかし、そんな努力を他の団員は全然注目しなかった。団員が増えたことにより、フィン達との関わりも少なくなっていった。
アイズともそこまで話すことはなくなっていた。今の彼女は同年代の子達とのほうと仲が良かった。九鬼斗はある意味失望した。確かに関わりを持っていなかったのは僕の責任かもしれない、だがここまでいないものとされるのが辛くなっていった。次第に九鬼斗は塞ぎ込んでいった。遠征には一人だけで行き、相応の成果を持って帰っ

た。ロキファミリアの等級はＡであり、遠征に求められる成果も高いものばかりだった。しかし、九鬼斗は持ち前の装備を使って、たった一人で、新種のモンスターを発見したり、ロキファミリアが到達していなかった階層に、一人で到達したりし、結果を持って帰った。『祝福』の効果でドロップアイテムも落ちやすいため、目標の納品数に達するのも早かった。勝手に遠征に赴き、遂行する。他の団員達からは更に嫌われることとなった。遠征に行くたび、わざわざ装備を外して、冒険をして、何度も死に、そして強くなっていった。そのようなことをする彼は次第に最強へと近づいていった。

第四話

天神　九鬼斗は一人で遠征をこなすようになってから三年、アイズ、ティオネ、ティオナ、ベートと四人が新たな幹部となり、四人はレベル４の第二級冒険者であった。フィン達はレベル６に至り、更に団長、副団長、幹部、と最古参の風格は強くなっていた。そんな中、一人の幹部、天神　九鬼斗はレベル７へと至っていた。

嘗ての二大ファミリアであったゼウスファミリアとヘラファミリアは三大クエストの一つに失敗し、失脚した。今強い探索系のファミリアはロキファミリア、フレイヤファミリアであり、次点でアストレアファミリアといった形であった。

そして今、ロキファミリアは次の遠征へ向けて準備をしていた。

今は普段着で、多少チョーカーや、腕時計等のマジックアイテムをつけているものの、普通の者とは違う雰囲気を出していた。

「では今度の遠征についてだが、誰か意見はあるか？」

と団長であるフィンは問いかける。

「いえ、意見なんてございません団長♡」

とティオネ。

「うわ～、今は控えてよティオネ～」

とティオナ

「けっ、とっとと決めればいいだろ」

とベート。

「なんですってー」と声を荒げるティオネ。

「ああ、もう落ち着いてよティオネ～。団長が困ってるよ」

「え、あっ、申し訳ございません団長～♡」

「だ、大丈夫だよ。じゃあ、遠征に行くメンバーは例年通りレベル３以上、サポーターとしてレベル２の子も少し、最初に目指すのは十八階層の安全階層へと向かうこと。ここで一回一休みして、五十階層へと向かう。それで文句はないかい？それと安全を期すため、マジックアイテムも使いながらの遠征となる。今回目指すのはあくまで安全階層の五十階層だ。これでいいかい？」

「「「「「・・・・・・・・」」」」」」
「ではこれで遠征の会議を終える。」
「ちょっといいか？」
「なんだい？九鬼斗」
「今回の遠征、行くことは進めない。ここにいる誰か一人が死ぬ可能性が高い」
「ああーん？ふざけたことぬかしてんじゃねえぞ、三下――！」
「はぁ、俺のスキルは知ってるだろうが。視えたんだよ。新種のモンスターが現れて、そのモンスターの溶解液によってまず、レベル２～３の者が大勢死ぬ。そいつらを頑張って庇おうとしたお前らの内、一人が死ぬ」
「それは君がいることで回避できないのかい？」
「まあ、可能だな。だけど、今回の遠征、俺を連れて行かないんだろう？だったら無理だな。今回の遠征でそれほどの被害を受けてもいいなら、どうぞ行ってくれ」
「・・それは可能性の未来だろ？君は別に一つの確定した未来を見るわけではないじゃないか」
「ああ、そうだな。確かに俺のスキル『未来視』は近い未来ならば確定したものを見ることはできるが、遠い未来に関しては色々な分岐があるからな。だけど、さっき俺がいったことは８５％の確率で起こる。俺は行くのをオススメしない。まだまだ発展途上の者達をここで殺すわけにはいかないだろう」
「じゃあ、君を連れて行こう。それでいいかい？」
「いや、俺は今回残念ながら行けない。ギルドからの強制任務が、俺個人に来たからな。その日程が被っている」
「だったら、それをこなしながらっていうのは可能かい？」
「不可能だ。今回の強制任務は闇派閥の討伐だ。アストレラファミリアとの共同任務でもあり、未来を視たところ、アストレアファミリアが壊滅する未来が視えた。
　彼らの方を救いたい。一方、今回の遠征は期間を前にずらしての行動だったのだから、もう少し、あとにずらせばいいだろう。いいか？

忠告はしたからな」
　そう言って九鬼斗は部屋から出て行った。
「っち、あの野郎なんなんだよ」
「本当よ。折角団長が作った計画を無茶苦茶にして、最悪よ」
「まぁ、言いたいことだけ言って、これってのはね～」
「・・でも、嘘ではないと思う」
「まぁ、それが彼を憎めないところだろうな。全く、昔はもっと可愛げがあったのだがな、変わったな九鬼斗も」
「そうじゃな、でも儂等全員が九鬼斗にかかってもあっさり返り討ちにされてしまうほどの実力差はあるしの」
「九鬼斗不在で、異常事態も起きる可能性大ならば、行く必要はないね。今回は九鬼斗の言葉を信じよう」
　こうして遠征のことは有耶無耶となった。
　九鬼斗は当初の目的通り、闇派閥の討伐へと向かっていた。
　必要最低限の会話だけし、アストレアファミリアの者達と共同で、闇派閥を叩く。
（今回、何か恐ろしいモンスターがアストレアファミリアを殲滅された未来が見えた、今回は万全を期して、全力の装備で来た。ステイタスも更新してもらったし、恐らく大丈夫だろう）

天神　九鬼斗
種族：ヒューマン
ｌｖ７
力　　：ＳＳＳ　２２３１
耐久　：ＳＳＳ　２３２１
器用　：ＳＳＳ　３１００
俊敏　：ＳＳＳ　２７８９
魔力　：ＳＳＳ　１７８１
『スキル』
『阿修羅の心』
　９つの命を有する。ランクアップするごとに命が９つ増える。

死ぬたびに全ステイタスに超高補正。
命の数：１８
『一方通行』
ありとあらゆるもののベクトルを操る。格上には効果が現れない。
『一撃男』
一撃一撃それぞれに力の高補正。一撃で敵を倒すと経験値が多くもらえる。
能動的行動に対するチャージ実行権。
『勇者』
何かを救うごとに全ステイタス少補正。早熟する。
『剣聖』
ありとあらゆる武具を使いこなす。
様々な加護を要する。
『剣聖の加護』『矢避けの加護』『矢当ての加護』『退魔の加護』『先制の加護』『闇避けの加護』『火避けの加護』『風受けの加護』『早駆けの加護』『泥抜けの加護』『湖の加護』『蒼天の加護』『涙天の加護』『伝心の加護』『騎乗の加護』『騎獣の加護』『無手の加護』『流血の加護』『不死鳥の加護』『霧の加護』『解毒の加護』『初見の加護』『再臨の加護』
精霊から好かれやすい。
『怪盗』
何かを盗むたびに器用と俊敏に高補正
『完成』
人の技術を見るだけで模倣できる。模倣したものを完成させ自分のものとする。
『選ばれし者』
他人から認められるほど全ステイタス補正。認められたものが神もしくは精霊の場合そのものに応じた加護がつく。早熟する。
『守護者』
誰かを守るごとに耐久に高補正。同じファミリアのメンバーの耐久にも高補正、仲がいいほどもっと互いに補正がかかる。

『発展途上』
ランクアップしたときに手に入る発展スキルを全て取ることができる。
『大嘘付き』
神にも嘘をつける。
『王の財宝』
異次元の空間を操る。
異次元に通ずる門を無数に出すことができる。
その異次元にあるものを門から射出、又は抜き取る事ができる。
現界のものを入れることが可能。
門を開くのは、意識的にすることができる。
異次元にあるものはその状態を永続的に保存する。
門に手を入れ、中に入っているものを望めば手元に来る。
手を入れずとも射出状態に待機させることもできる。
入れられるものに限界はない、しかし、生物は入れられない。
『未来視』
未来を視ることができる。
先の未来を見るほど精神力（マインド）の消費量が増す。
任意発動。（アクティブモーション）
視える未来の先に限界は無い。
『過去視』
過去を視ることができる。
遠い過去を見るほど精神力（マインド）の消費量が増す。
任意発動。（アクティブモーション）
視える過去の先に限界は無い。

『魔法』
『エレメンタル・フォース』
複合魔法。
単一魔法。
九つの魔法を複合、又は単一として扱うことができる。

効果永続魔法。
詠唱分『エレメンタル・フォース』
この詠唱を唱えた五分後まで九つの属性魔法を扱うことができる。
闇：『ヘル・マータ』
周りに黒い煙を出す。
黒い煙に居続けた者は身体能力が落ちていく。
火：『ファイア・フレイム』
火の弾を出す。
水：『バブル・ウォーター』
泡状の水球を魔力に応じた数を出す。
対象の相手にぶつかると軽い打撃程度の衝撃を与える。
泡が割れた時、半径１ｍ範囲の状況がわかる。
聖：『キュア・アーク』
一つの光の塊を出す。
魔力の消費量に応じて大きさ変動。
光の弾にいる者は少し回復する。
雷：『サンダー・ボルト』
雷を打ち出す。
形状は変幻自在。
魔力の消費量に応じて距離が変わる。
風：『ウィンド・ブレス』
強い風を打ち出す。
地：『サンド・アース』
地面が土の場合、形状を好きに変えることができる。
氷：『アイシクル・ヘイル』
氷の霧を打ち出す。
範囲は魔力に応じて変化する。
無：『エネルギー・ショット』
込めた魔力によって威力が変わる。
最大二分間魔力をチャージすることが可能。
『ショット』と詠唱された時にエネルギーの弾を打ち出す。

複合魔法・複数の魔法の詠唱分を掛け合わせることによって、二重属性の魔法を扱うことができる。
前後で分かれている詠唱分を別の詠唱と入れ替えると複合魔法が完成する。
この魔法は進化する。
『七つの大罪』
長文詠唱―
『我が身は影　我が身は咎　我が身は罪』
『我が身に宿すは異なる七つの罪』
『それは大罪と呼ばれ、恐れられた』
『ある時は世界を救い』
『ある時は世界を滅ぼした』
『今代の黙示録として大罪を背負う』
『それは原初にして永遠の呪い』
『その怒りを、憎しみを、全てを喰らえ』
『我が身は咎人となりその破壊（ちから）を使おうとする者也』
『ギルティ・セブンスレギオン』
第一【傲慢】の罪
我が身は如何なる事象も弾く万象の盾也
【傲慢の罪・神全反射】
［ギルティ・スペルディア《カウンター・アンノウン》］
第二【嫉妬】の罪
我が怒りは憎悪となり世界を恨み終焉に至る
【嫉妬の罪・終贈の祝逝】
［ギルティ・インウィディア《デッドエンド・アフター》］
第三【憤怒】の罪
我が一撃は煉獄の炎をも飲み込み喰らい尽くす
【憤怒の罪・喰煉之怨罪】
［ギルティ・イラ《ヴォルカ・ドライグレイブ》］
第四【怠惰】の罪
我が身は不動（うごこ）かず、汝等もまた不動（うごこ）かん

【怠惰の罪・強制不動の陣】
［ギルティ・アケディア《バッドシャープ・フルスキン》］
第五【強欲】の罪
万物を贄となりて我が物となり我が武具（もの）となれ
【強欲の罪・皇邪の宝物庫】
［ギルティ・スペルディア《キング・アイテムボックス》］
第六【暴食】の罪
我知識を喰らう者
【暴食の罪・脳色晩餐】
［ギルティ・バイト］
第七【色欲】の罪
我恋焦がれる者故感情に飢えた獣なり
【色欲の罪・感情の呪い】
［ギルティ・ルスト］
最終詠唱
『我元に七つの大罪を示せ』
七つの武器が権限する。
『』
『発展アビリティ』
創造者ＳＳＳ　神秘ＳＳＳ　狩人ＳＳ　祝福Ｓ　魔道Ｓ　天武Ｓ　剣聖Ｓ　対異常Ｓ　拳打Ｓ　潜水Ｓ　魔防Ｓ　精癒Ｓ　治療Ｓ
九鬼斗は自ら作った魔道書（グリモア）で新たな魔法を発現させていた。それは自らが犯した間違いを償うための魔法。
九鬼斗は嘗て作った最高傑作の他にも、王の財宝の中には新たな宝具を沢山入っていた。全ては大切な人達を救うために。
九鬼斗がロキファミリアの者達から、悪感情を伴った目で見られるようになり、ロキファミリアにいることに疲れていたので、外を適当に歩いていた時、彼はみた。悪いものを取り締まり、正義を遂行する者達を。その姿を見てからというもの、アストレラファミリアの手助けをするようになった。そして、そんな九鬼斗に感謝を述べてくれる

人達はいつしか、九鬼斗の中では大切な存在となっていた。特にリューという、覆面をかぶっていて、素顔は一切わからないが、彼女もまた、強く、そして、美しい女性であった。アストレアファミリアの者達も、九鬼斗の活躍や、性格を見ている内に、心を開くようになっていた。リューに関しては、素顔さえも見せてくれたほどであった。そんな彼女等を、九鬼斗は失いたくなかった。そのために今回、彼女等の死を回避するべく、この任務に当たった。

――回想終了

「九鬼斗さん、本当に巻き込んでしまってすいません」
「いえいえ、これぐらい構いませんよ。それに闇派閥のことを良く思っていないのは僕も同じですからね」
「本当に感謝します」
「本当、リューって九鬼斗と話す時、嬉しそうな声するよねー」
「な／／何を馬鹿なことを」
「まあまあ」
「本当に彼女らには困ったものです」
「いいじゃないか、賑やかで、皆それぞれとても仲良しで、こんな僕にも仲良くしてくれる優しい人達じゃないか」
「ただのおせっかいな人というだけですよ」
「そうでしょうか」
と普段通りの会話をしていたものの、皆緊張感はしっかりと持っていた。
そして、闇派閥の本拠地へと奇襲をかけた。
「かかれー！」
その言葉と同時に、九鬼斗とアストレアファミリアの者達は一斉に奇襲をかけた。
アストレアファミリアの者達は全員第二級冒険者であり、とても強い冒険者である。そして、九鬼斗は言わずもがな、オラリオに二人しかいないｌｖ７の冒険者であったため、直ぐにでも殲滅しようとして

いた。そして、奇襲に気が付き、逃げる者達を九鬼斗達は追った。
――二十七階層
闇派閥の頭「はぁはぁ、ここまできたら返り討ちにしてやる！火炎石で吹っ飛びやがれー！」
そうして大量の火炎石が爆発を引き起こし、それが戦闘の合図となった。
激しい戦いが続いた。九鬼斗は素早く、闇派閥の者を殺し、できる限り、アストレアファミリアの者達を手助けした。そして、闇派閥の者達が少なくなってきた頃、何も知らない冒険者のパーティーが迷い込んだ。その冒険者のパーティーは当然狙われ、九鬼斗達はその者達をかばうようにして、撤退しようとした。その隙をつくため、闇派閥の者達は残った、爆煙席を全て、爆発させた。九鬼斗は皆を守るため、マジックアイテムの一つである、『絶対防御』という使い捨てだが、大きなバリアを貼り、どんな攻撃にも5秒間耐えるというものだった。そうして爆発が終わり、闇派閥の者達が絶望の表情を浮かべた頃、それはやってきた。
ダンジョンというのは生きている。一箇所を一気に壊されたりすると、ダンジョンが、ダンジョンを破壊する元凶を殺すためにダンジョンが哭いた。比喩でもなんでもなく哭いた。もし女の人が、世界そのものに大きくなったら、上げるような、そんな音程の声。
「な、なんだこれは」（『未来視』！）
それはとても大きく、そして速い、ただ人を殺すために生み出された、殲滅型モンスター。ダンジョンが破壊活動を行っている元凶を殺し、再生するために送り出されたモンスター。それは一振りで何人もの命を奪う・・
「皆逃げろー!!!」
「ど、どういう意味で」
そして、声が収まった頃、『それ』はやってきた。これまでにも何人かの冒険者を屠ってきたのだろう。水晶の光によって露わになった『それ』は、体躯は細く、巨大だった。二腕二足。腕はその巨大な巨躯

に似合わないほど、不気味なほど細長く、同じく細長い脚の構造は逆関節となっていた。肉は無いに等しく、体を覆う、鎧のような『殻』は、不可思議な紫紺の色を薄く、写していた。腰からは４ｍはある硬質な尾もついていた。そしてそのモンスターの牙によって食べられたであろう冒険者達の血がその口に、大量についていた。

イメージ的には『鎧を纏った恐竜の化石』であった。

その場にいた者達全てはその姿に唖然とした。そして、アストレアファミリアの団員である一人が魔法を『それ』に向かって放った。そしてその一部始終を見た、九鬼斗は新たに見えた未来に驚愕することとなり、それは現実となる。

『それ』は纏っていた鎧のようなものが光ったと同時に、魔法を反射した。

「な」

悲鳴をあげる間もなく、その団員は命を散らした。更にそのモンスターはその巨体からは考えられないほどの速度を見せ、瞬く間に闇派閥の者達を殲滅した。

仲間がころされたことによって自暴自棄になった者もまた、その命を、モンスターが持つ爪によって散らした。そんな様子を見ていた九鬼斗は声も出なかった。

未来を確認していたのに、救えなかったと、自身の無力さを呪った。

そのモンスターは更に猛攻を続け、気がつく頃には闇派閥とアストレアファミリアの者達も数を減らしていた。

「はあはあはあ、こんな状態だ。とりあえずあのモンスターを倒すしかない。見た限り魔法は通用しないだろう。だけど、俺のマジックアイテムを使えばい「うるさい！」えっ」

「私達の大切な仲間が殺されたんだぞ！冷静になんてなれるか！私だけでもあいつを倒す！」

「ま、待ってｋ「行くぞー！」

「「「「おう！」」」」

そうして彼女等は強大なモンスターへと立ち向かっていった。九鬼斗の忠告も無視して・・・

戦闘が開始された5秒後にはもう一人の仲間は爪の餌食になっていた。
九鬼斗はただ立っていることしかできなかった。守れなかったと、ただその事実だけが彼に重くのしかかった。その間も団員達は命を散らしていく。そして団長、リュー、リューの好敵手であり、親友であるゴジョウノ・輝夜しかいなくなっていた。彼女らは短い戦闘の中で、魔法は一切通じず、超至近距離での戦闘しか効果はないと知った。しかし、絶望は誰にでもやってくる。
輝夜はモンスターの牙によって殺されそうになった。
「た・たすけ　グチャ
涙も流しつつ懇願したその願いは叶うことはなかった。
団長とリューはただその事実を知り、さらなる復讐心に駆られ、戦闘を続けた。
泣きたい気持ちも力に変え、戦い続けた。レベル4である二人はなんとか命をつなぎながら戦っていた。しかし、決定打に欠けた。そして団長は苦渋の決断をした。
「リュー、後は頼んだよ」
そう言って団長である彼女は更に力を増し、弱点である耐久力の低さに気づき、命を賭してでも、魔石があるであろう場所に向かって攻撃し続けた。そして、そんな彼女に対しても無情な爪は命を刈り取った。
リューは団長であり、自分を救ってくれた彼女の犠牲の果てに、大きな一撃をかました。しかし、それでも足りなかった。そして、無情な爪はリューに向かい、振り下ろされ・・る寸前、九鬼斗は天災剣エアを振り抜き、そのモンスターを屠った。九鬼斗はリューが殺される、恐らく自分が好意を持っている相手を守るために反射的にエアを振り抜いた。真価は別にあったとしても、ただ振るっただけでも耐久性が低い、『それ』を倒すことができた。そして、リューは尋ねた。
「なぜ、これほどの力をもっておきながら、他の者を救ってくれなかったのですか？なぜ、私が彼女達の元へ胸を張って逝けるのを邪魔したのですか、なんで

なんで・・私だけを救ったのですか？」
「君は僕の大切な人だから」
「では他の者とは違ったと？」
「そうじゃない、ただ僕の力が足らなかったから、僕の精神が弱かったから守れなかった。本当にごめん」
「そんな謝罪を聞きたいわけではない！・・もう・・私を殺してください。その方がよっぽど楽だ」
「それはできない。君だけなんだ、守れたのは。他のアストレアファミリアの人達も君に生きて欲しいと思っている」
「うっ、ああああああああああーーーーーーーーーーーーーーーーーー!!」
「ごめん、本当にごめん」と涙をこぼしながら九鬼斗はリューの側へと向かった。
しかし、「近寄るな！もはや貴方と話すことは何もない！」
そうして、九鬼斗と『疾風』リュー・リオンは大切な者達を失い、九鬼斗とリューの間にも大きな溝が出来てしまった。
そうして、九鬼斗は唯一守れた大切な人からも拒絶され、ロキファミリアの者達にも拒絶され、家族や大切な者を作り、守るなんていうことは到底叶うことがなくなってしまった。九鬼斗はこの悲劇の後、ロキに事情を説明し、一旦放っておいて欲しいと頼んだ。ステイタスだけ更新してもらい、九鬼斗は大切な者達から拒絶され、乱れた精神を落ち着けるためにも、ダンジョンの奥深く、誰も干渉してこない場所まで向かった。Ｌｖ８という規格外な冒険者となって。
王の財宝に、生きるために必要なものを全て入れ、長期間五十階層、つまり安全階層にて、暮らした。深層のモンスターを、様々な技や、武具を用いて、モンスターを好きなだけ屠り、神に直接作ってもらったオーダーメイドの双剣をメインに、色々なことを試した。階層主さえも特訓のために倒し、大量の経験値も手に入れ、

深層での暮らしにも慣れた頃、九鬼斗という存在は架空の存在として扱われることとなった。ダンジョンに一年以上滞在し、誰からも情報を得られていないため、ギルドはもう生きていないと判断した。いかにレベル８に成ろうとも、食事等の問題で、この長期間生きられないだろうという判断を下した。

九鬼斗はただひたすらに武具の扱い、そして己自身を徹底的に鍛えた。今度こそ何も失わないために。既に最強の冒険者であるということも知らず。

――三年後

「そろそろ更新してもらうために帰るか」

「新しい装備も手に入れたし、二度とあんな悲劇には合わせない。例え、大切な者達からは嫌われようとも、生きていて欲しい。ただそう切実に思うよ、俺は」

この間に様々なことがあった。

アイズ、テイオネ、テイオナ、ベート達のレベル５へのランクアップ。

新たなファミリア、ヘスティアファミリアの結成。

闇派閥の新たな動き。

言語を話すモンスターの群れ。

これから、この最強の冒険者である天神　九鬼斗は何をなすだろうか。